

日本分類学会連合ニュースレター

News Letter published by the Union of
Japanese Societies for Systematic Biology

No.6 [2004年12月6日]

連載「連合加盟学会の活動紹介」

日本菌学会

畑井喜司雄（日本獣医畜産大学・日本菌学会会長）
吹春俊光（千葉県立中央博物館・学会担当連絡員）

【沿革】

日本菌学会は東京菌類談話会が基礎となり、菌類に関する学際領域の研究の推進と普及を目的として1956年2月に創設された。2006年には50周年を迎える。設立当時の会員数は149名、初代会長は、菌類の性やオニノヤガラとナラタケの菌根について研究した草野俊助である。現在の会員数は国内外からの会員約1600名である。会員は基礎から応用まで、生物学、植物病理学、微生物学、農芸化学、発酵工学、応用きのこ学、林学、医学、薬学、食品衛生学、環境科学など、その所属分野は多岐にわたる。研究の対象となる分類群は、担子菌、子囊菌、接合菌類などの真菌類、また伝統的に菌類としてあつかわれてきた鞭毛をもった菌類や変形菌類などであり、細菌やウイルスの分野は含んでいない。日本で認知されている菌の種数は、人間の生活に深い関わりをもつ菌類や、肉眼的な子実体をつくる菌類を中心に約13,000種であるが、これは現存する種のほんの一部と考えられている。菌類が包含する分類群は多岐にわたり、またその生活様式も、腐生・共生・寄生という多様な栄養摂取様式をもっている。腐生・共生・寄生の対象生物種は、実に多様であり、また共生・寄生には種特異性という側面がある。以上のことから莫大な菌種の存在が容易に予想されるが、その全貌はいまだによくわかっていない。

【出版】

学会が出版する学術定期刊行物（学会誌）は菌類に関する多様な分野に関する論文を掲載しているが、国内外で発見される菌類の新種・新産種を掲載する国内で唯一の雑誌であり、例えば第41巻では1新科、58新種2新変種、22日本新産種を掲載している。学会誌「日本菌学会会報」は従来英文と和文の混合誌であったが、1994年に英文誌と和文誌の分離を計り（英文誌年4冊、和文誌年4冊）、1999年には英文誌の年6冊発行、2002年には英文誌をSpringer-Verlag社からの発行となった。現在では、英文誌「Mycoscience」を年6回（約500頁）、和文誌「日本菌学会会報」を年2回（約100頁）、ニュースレターを年4回（約100頁）発行している。英文誌の編集には現在国内15名、国外14名の編集長・委員が携わり、質の向上を心がけている。2002年には、学会誌の創刊号からSpringer社へ移行する2001年までの英文・和文・ニュース全約2万頁をPDF化したCDを、学会で作成し販売している（末尾HP参照）。英文誌の発行にあたっては2002年から日本学術振興会からの出版助成金を継続して受けることができなくなるような事態となり、学会誌の発行に深刻な影響を受けている。

【学会の運営など】

日本菌学会は、理事会（会長、副会長、理事10名）と各種委員会（編集等）により運営されており、重要な議題は評議員会（評議員25名～30名）と総会において検討・議決される。各種役員の任期は2年である。各種の賞制度を設けており、日本菌学会奨励賞（1991年から）、日本菌学会賞（1997年から）、日本菌学会教育文化賞（1997年から）、論文賞として日本菌学会平塚賞（2002年から）などがある。事業は、年1回の大会（次項参照）の他、年1回の菌類の採集会と同定会（菌学会フォーレと称している）を、日本各地や国外（1997年韓国菌学会と合同、2005年には米国菌学会との合同採集会を予定）で開催し、また各種シンポジウムを開催している。学会の支部会として、東北（1983年創設）、関東（1987年創設）、西日本（1990年創設）の各支部会があり、図鑑の出版、国外から講師を招いた各種シンポジウム・講座の開催、などそれぞれの特色を生かした活発な活動をおこなっている。学会の運営にあたり、名簿の管理、会報の発送など、多くの事務作業を学会事務センターに委託していたが、センターが消滅し、現在庶務理事を中心として緊急体制で事務をおこなっているが、深刻な事態となっている。

【年次大会】

年次大会（学会）は毎年5月下旬に開催する学会最大の行事である。開催地は全国を順に巡り、2002年の46回大会は信州大学農学部（長野県南箕輪村）、2003年の47回大会は北海道大学（札幌市）、2004年の第48回大会は長崎県立シーボルト大学（長崎市）で開催された。2005年の第49回大会は、設立50周年記念事業の一環として、日米菌学会合同大会として7月から8月にかけてハワイ大学ヒロ校で、約1週間の大会を予定しており、併せて州立公園内での採集会、国立公園へのイクスカーションなどを計画している。2006年千葉県で開催が予定されている第50回大会では、様々な50周年の記念事業が計画されている。通常の大会では、約120前後の口頭・ポスターによる発表がおこなわれ、口頭発表の割合が多い。境界領域の判断が難しいが分類関連の発表は約4割である。また大会では、受賞講演や招待講演が行われる他、各種シンポジウムが開催される。2004年のシンポジウムは「日本の菌類イベントリーII」と題し、1998年の京都大会でのシンポジウムに引き続き、日本の菌類イベントリー事業にかかわる様々な取り組みが議論された。日本で記載された全ての菌の学名・和名・文献を網羅した日本菌類目録の出版が、個人的な努力で準備されつつあるという報告もあった。

【アマチュアの活動】

最近の年次大会を巡る興味深い動きとして「アマチュア研究者の取り組み」という、菌学を職業としない会員によるプログラムも大会に盛り込まれるようになったことがあげられる。国内には80を越えるきのこ愛

好団体が存在し、会員が数十名のところから、300名を越える団体も少なくない。このような団体に所属する学会員からの熱心な働きかけにより、2001年の東京大会（日本獣医畜産大学、武蔵野市）からプログラムに組み込まれるようになった。日本の菌類インベントリ事業の推進にあたり、各地で活躍するアマチュアの実存は非常に重要であると理解されている。また最近、アマチュア活動をめぐる興味深い事件があった。従来、多くの大先生により担子菌類として広く認識され、各種図鑑にも長い間、担子菌類コウボウフデ科として扱われてきたコウボウフデという種が、いわゆるアマチュアの研究により、子囊菌類と認定されたのである（担子菌とは門が異なる）。発見が難しい若い子実体から子嚢胞子が観察され、形態と分子をつかった研究がすすめられ、発見者本人により2編の論文としてまとめられた。アマチュアと称される人々のレベルの高さと情熱を象徴する事件であった。

学会に関する詳しい情報は、日本菌学会ホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/msj7/>)を参照されたい。

日本昆虫学会

石井 実（日本昆虫学会会長）

【活動】

本会は、1917年の創立以来、昆虫学の発展に貢献するだけでなく、「昆虫類の多様性保護のための重要地域」を出版するなど自然保護などについても提言を行ってきた。年に1回大会を開き、会員の研究成果を発表するとともにシンポジウムを開催し、最新の昆虫学分野の話題や自然保護などについて活発な討論を行っている。

【会誌】

英文誌「Entomological Science」年4回発行
和文誌「昆虫ニュー・シリ・ズ」年4回発行

【会員数】

2004年8月20日現在1,426名（このうち、海外会員は48名）

【会費（年額）】

一般正会員10,000円、学生正会員5,000円、海外正会員5,000円、団体会員は15,000円、賛助会員30,000円。

【大会】

<大会参加者数>

2003年（第63回大会）：東京農業大学（2003年10月11～13日）：414名

2004年（第64回大会）：北海道大学（2004年9月24～26日）：288名

<大会における講演数>

2003年：ポスター発表 27 口頭発表 150

（うち、分類・系統・多様性に関わる発表は、全体の48%）

2004年：ポスター発表 32 口頭発表 127

（うち、分類・系統・多様性に関わる発表は、全体の45%）

<2003年度大会シンポジウムのテーマ>

1. 「昆虫学におけるDNA解析：系統関係以外に何がわかるのか？」

2. 「昆虫の多様性保護の現状と課題」
<2004年度大会シンポジウムのテーマ>

1. 「日本の昆虫相の成立史」

昆虫化石からみた日本の昆虫相形成史、オオニジュウヤホシテントウ種群の進化史、日本産水生ボタルの進化史、分子情報から見たヒグマとエゾシカの生物地理的歴史

2. 「レッドデータブック - その役割と問題点」

レッドデータブック（総論）、日本産昆虫レッドデータブック改訂作業にあたって、日本産蝶類県別レッドデータリスト（2002）

3. 「交尾器の進化と多様性：分類学、形態学、行動学、進化学の接点」

大型甲虫類の雄生殖器形態の発生的安定性と適応的変異性、交尾器進化を巡る仮説と交尾器変異に見られる特殊性、性的コンフリクトによる交尾器のサイズ多様化と多発的種分化：ババヤスデ属の例、交尾器に働く性選択・ウスバツバメガの場合

【分類に関する最近のトピックス】

「シラミ目は多系統群！」 吉澤和徳氏（北大農：専門は形態学）らの最近の研究により、シラミ目がチャタテムシ目に包含されること、さらに、シラミ目が多系統群であることが示された。吉澤氏は、得られた分子系統樹にもとづいて、シラミにおける寄生性の起源についても推定している。

【入会】

日本昆虫学会のホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/entsocj/home.htm>)の会員ページから、会員登録フォームに必要事項を入力することにより入会手続きを行うことができる。その場合、登録後に（株）国際文献印刷社から会費納入の案内が送付される。上記の手続きができない場合は、〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-4-19（株）国際文献印刷社日本昆虫学会業務担当（Tel: 03-5389-6304; Fax: 03-3368-2822; e-mail: entsocj-post@bunken.co.jp）から本学会入会申込用紙をとりよせ、必要事項を記入して返送されたい。返送後3週間ほどで登録完了の通知とともに会費の振込用紙が送付される。

【お問い合わせ先】

日本昆虫学会庶務幹事 広渡俊哉
〒599-8531 堺市学園町1-1
大阪府立大学大学院 農学生命科学研究科
応用昆虫学研究室
Phone & Fax: 072-254-9413
E-mail: hirowata@plant.osakafu-u.ac.jp

日本植物分類学会

加藤雅啓（東京大・院・理）
綿野泰行（千葉大・理）

本学会は、2001年5月に（旧）日本植物分類学会と植物分類地理学会が統合されて設立された。（旧）日本植物分類学会と日本語の名称は変わらないが、英語の名称がJapan Society of Plant TaxonomistsからThe Japanese Society for Plant Systematicsに変更された。本学会の母体となった2学会は、共に50年以上の長い歴史を刻み、植物分類学の発展に寄与してきた。

しかし、(旧)日本植物分類学会が、植物分類学関連の学会発表の場として中心的な役割を果たしてきたが英文誌を持っていなかったこと、一方、植物分類地理学会は伝統と実績のある学会誌「植物分類、地理 Acta Phytotaxonomica et Geobotanica」を持つ雑誌中心の学会であったことから、相互補完的に意義のある統合を目指し、新学会設立に至った。

新学会設立に伴い、「Acta Phytotaxonomica et Geobotanica」は英文専門誌となった。2004年度で第55巻を数える。いままで年2回の発行であったが、2004年度からは年3回に拡大された。その他の印刷物としては和文誌「分類 BUNRUI」と日本植物分類学会ニュースレターがある。それぞれ、年2回と4回の発行が行われている。「分類 BUNRUI」は本学会が中心となって企画されたシンポジウムのプロシーディングスや、総説、和文原著論文などが中心である。ニュースレターは年次大会の案内や、各種委員会の活動報告、その他様々な植物分類学関連の情報を会員に提供している。

学会の構成員の研究対象は菌類、地衣類、藻類、コケ、シダ、種子植物、化石と幅広い。個人会員は現在、通常会員898名、名誉会員13名である。

年次大会は、毎年だいたい3月中旬に全国各地で、3日間をかけて行われる。最近では初日にシンポジウム、2日目に口頭発表・ポスター発表と日本植物分類学会賞の受賞講演、3日目は口頭発表のみというプログラムが多い。講演数は口頭とポスターを合わせて70件程度(シンポジウムを除く)である。年次大会以外にも、講演会と野外研修会が年1回開催されている。

本学会の活動の特色として、雑誌の発行と年次総会以外に、活発な各種委員会活動を挙げることができる。委員会は学会長の委嘱によって設けられる審議会で、現在では絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会、絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会、植物データベース専門委員会、IAPTシンポジウム2004準備委員会(時限)、学会賞選考委員会、国際植物命名規約邦訳委員会が設けられている。

絶滅危惧植物・移入植物専門委員会の主な任務は、環境省とタイアップしたレッドデータブックの改訂作業である。定量的データに基づくリスク評価を導入しているため、各都道府県に主任調査員を置き、綿密な調査を行っている。第一委員会は維管束植物、第二委員会は、コケ、藻類、菌類を担当している。

植物データベース委員会は、Flora of Japan(講談社サイエンティフィック)の電子化を行い、その成果は<http://foj.info>で既に公開されている。現在はGBIFとの関連で、国内のタイプ標本の電子化に取り組んでいる。この成果も順次公開されているので、日本分類学会連合のホームページにリンクされているJTYPESをご覧ください。

IAPTシンポジウム2004準備委員会は、IAPT(国際植物分類学会)との共催で、「アジアの植物多様性と分類に関する国際シンポジウム」を千葉県佐倉市の歴史民俗博物館において、今年の7月29日から8月2日にかけて開催した。日本を入れて15ヶ国、総勢176名(内、外国からは50名)の参加があった。なお、このシンポジウムは本分類学会連合の後援を受けた。

学会賞選考委員会では、日本植物分類学会賞の選考を行っている。受賞者は、年次総会において受賞講演を行い、表彰を受ける。

国際植物命名規約邦訳委員会は、「国際植物命名規約(セントルイス規約2000)」の日本語版作成に取り組み、2003年11月に発行を行った。今後とも改正のたびに、日本語版の作成に取り組む計画である。

本学会への問い合わせ、出版物、入会案内、年次総会の情報については、ホームページ(<http://www.soc.nii.ac.jp/jsp/>)をご覧ください。

日本線虫学会

荒城雅昭

(日本線虫学会評議員・日本分類学会連合団体代表者)

日本線虫学会は、ずばり「線虫学の進歩及び普及を図ること」を目的とする学会で、「会誌及びその他出版物の刊行、講演会及び研究会の開催、その他会の目的を達成するために必要な事業」を行っている。発足は1993年、前身である日本線虫研究会の歴史は、1971年までさかのぼれるが、研究会時代を含めても比較的新しい学会である。現在の会員は241名、線虫という研究対象とする分類群の大きさに比べれば少ない会員数であるが、一度大会に参加すれば参加者とはほとんど顔見知りになれるなど、小規模学会には小規模学会のよさがある。

本学会は、1993年5月京都市で第1回大会を開催して以来、毎年おおむね秋季に大会(通常2日の日程で総会およびシンポジウム・講演会を開催)を行っている。本年9月2~3日に福島市で第12回大会を持ったところで、参加者は72名、講演数は30題であった。「日本線虫学会誌」は、巻数を前身の「日本線虫研究会誌」から引き継いで、本年で第34巻を数え、学会誌となつてからは年2号を発行している。その総ページ数は第33巻で104ページ、報文数8編(短報含む)となっている。その他、学会から会員へのお知らせ、その他情報交換の目的で「日本線虫学会ニュース」を年3号ほど発行し、会員へ郵送している。その他日本線虫学会ホームページ(<http://senchug.ac.affrc.go.jp/>)を開設し、入会案内や学会会則、日本線虫学会誌の目次や日本線虫学会ニュースのバックナンバーなどが見られるようにしている。メーリングリスト「NEMANETJ」の運用も行っていて、メーリングリスト加入者間では瞬時に情報交換ができるようになった。現会長は二井一禎京都大学大学院教授、学会事務局は(独)農業・生物系特定産業技術研究機構中央農業総合研究センター虫害防除部線虫害研究室(〒305-8666 茨城県つくば市観音台3-1-1 TEL:0298-38-8839 FAX:0298-38-837)に置いている。

2002年に学会発足10年を迎えたことから、多少旧聞に属するが、本学会の最大の課題である会員の増加と日本線虫学会誌の充実と少しでも役に立て、線虫学の一般への普及を図るため、2002年10月に開催した第10回大会で記念シンポジウムの他、学会誌表紙コンテストなどの行事を開催した。本年発行の第34巻より、日本線虫学会誌の表紙をコンテストの最優秀作品をベースにした、「線虫学の学会誌では世界で一番派手」なものに一新したところである。

また2002年頃より線虫学の研究手法の普及をはかるため、線虫分類の基礎、標本作成法、分子的手法を含む同定方法、土壌などからの分離法など基盤的な手法から、サンプリング法やマツノザイセンチュウ・昆虫病原性線虫・海産線虫・*C. elegans*などの具体的な取扱方法まで網羅した実験書「線虫学実験法」の刊行に取り組んだ。日本線虫学会会員27名が分担執筆した本書(日本線虫学会発行、247pp.)は、本年3月に発行にこぎつけ、これまで線虫になじみのなかった方々にも利用できる手引書として、日本線虫学会ホームページ

から購入申し込みができるようになってきている（頒価 3,000 円（+送料 340 円）、書店での購入不可）。

土壌中に生息する自活性線虫は、体長 0.5~4mm 程度で肉眼では分離操作の後やっとその存在が認められる程度の小さい動物であるため、一般にはあまりなじみがない。動物の寄生虫には肉眼で認められる大型のものが多いし、海産線虫にはおもしろい形態をした線虫もある。しかしそれらでさえ、一見しただけではその形態が多様性に富んでいることには気付にくい。手足がなく体をくねらせる線虫の行動は、気味悪がられることが多く、通常色彩を持たない地味な線虫を集めたり、わざわざ顕微鏡を使って観察して楽しもうというアマチュア研究者にはまずお目にかかれぬ。

しかし線虫は身近に普通に生息する動物で、家庭菜園のウリ科やナス科の野菜の根をこぶこぶにしているのはネコブセンチュウ、今頃マツを「紅葉」させているマツ枯れの病原はマツノザイセンチュウである。その辺の土壌一握り（20g 程度）の中からは、多ければ 3,000 頭、40~50 種にもわたる線虫が見出される。ところが身近なところで見出されるその 40~50 種の線虫の中から、いくつも未記載種が見出される。日本の線虫学はまだこんなレベルかと思われるかもしれないが、わが国で線虫相の 3/4 以上が種レベルで解明され報告された地域はまだないと思われる。こと線虫については、日本全国津々浦々が分類研究のフロンティアであるといつて過言ではない。

線虫は昆虫に次ぐ種数を持つ線虫学の研究対象には広範なものがあり、研究分野を大別して判りやすいように箇条書きにして示すと、

- 作物を加害する有害生物としての植物寄生性線虫
- 回虫・蟯虫などの人畜および動物の寄生性線虫
- 陸上で土壌生態系の一員として物質循環などに関わる自活性土壌線虫
- 波打ち際から深海の底まであまねく分布する海産線虫

以上 4 つの分野に現代の線虫学は分岐している。近年、モデル生物としての *C. elegans* の研究分野が他の線虫学の分野全部を併せたものに匹敵するほどの発展を見せ、さらに、生物防除素材としての昆虫病原性線虫などの有用線虫の研究分野が注目を浴びようになって来ている。

この内、動物寄生性線虫の分野は医学・獣医学の影響を色濃く受け、扁形動物の寄生虫とともに寄生虫学として独自の発展を遂げて来たといえるが、線虫学という学問分野の発展の初期段階では、わが国のみならず欧米諸国でも、植物寄生性線虫の分野がその発展の中心であった。したがって、日本線虫研究会の発足およびその後の活動の中心となったのは植物寄生性線虫を研究対象とする農業関係の試験研究機関に所属する会員であった。日本線虫学会の発足にあたって、動物寄生性線虫、*C. elegans*、海洋線虫なども本学会が対象とする研究分野であることが強調され、例えば寄生虫学の多田功会員（元編集員）、モデル生物 *C. elegans* の三輪錠司会員（評議員・編集委員）、海洋線虫の白山義久会員（元評議員、編集委員）らの学会運営への参画を得た。

しかし現在でも、会員の多くを農業関係試験研究機関所属者が占めている。日本線虫学会誌への投稿も農業線虫分野が主流である状況が続いている。例えば本年の第 12 回大会の講演 30 題のうち、植物寄生性線虫関係が 21 題を占め、有用線虫関係が 5、*C. elegans* 関係が 2 などとなっていた。ただ、植物寄生性線虫以外の分野からの投稿や講演申込みは、わずかではあるが

増加傾向にあるとみている。本学会の会員を所属機関別に見ると、農業関係試験研究機関所属の会員が多いのに対して、大学に所属する会員が著しく少ない。ここ数年、本学会の会員数は減少傾向にあるが、新しい実験書「線虫学実験法」の出版を契機に農学の視点からだけでなく、動物学や生態学の視点から線虫を研究対象としようという方が増え、本学会に入会されることを希望している。ちなみに、分類関係の 2003 年第 33 巻日本線虫学会誌への投稿、第 12 回大会への講演申込みはそれぞれ、3（全体 8）、7（全体 30）で少なくはない。わが国の線虫相に未解明の部分が多く、未記載種に枚挙の暇がないのに比べれば少ないとも考えられるが。

C. elegans でゲノムの全塩基配列が解明され、様々な分野に分化していた線虫学が、再びゲノムという共通の尺度で統一的に捉えられる時代がめぐって来た。その一つの現れが、最新の英語の線虫学の教科書「The Biology of Nematodes」(Lee, D.L. ed. (2002), Taylor & Francis, London, 35pp.) に示された線虫全体の分子系統樹 (De Ley, P. & Blaxter, M.) であり、分子系統解析による線虫の脱皮動物の一員としての位置付けである。*C. elegans* をモデル生物とした分子生物学的研究や、主要植物寄生性線虫の一つであるネグサレセンチュウの DNA を用いた分子分類などでは、わが国も世界のレベルに比べてもいい線を行っている。ポストゲノム時代の分子生物学と線虫学が相互に作用しあって発展することを期待したい。

会員寄稿

2004 年 TDWG ワークショップ報告

伊藤元己

(東大・総合文化・広域システム)

Taxonomic Databases Working Group (略して TDWG, “タドウィグ”と発音される) とは、分類学関連のデータ構造の標準規格を策定するために作られた組織です。その歴史など、詳しくは TDWG のホームページ <http://www.tdwg.org> を参照してください。今年はニュージーランドのクライストチャーチで 10 月 11~17 日という日程でワークショップが開催されました。

今回は 10 月のはじめにニュージーランドの首都、ウェリントンで Global Biodiversity Information Facility (GBIF) の GB9 および Global Taxonomy Initiative のワークショップが開催されて、日程的にはその後設定されました。こちらの方は別の機会があったら内容を報告します。このように現在、数多くの活動が、生物多様性に関する分野で活発に行われていて、Biodiversity Informatics (生物多様性情報学) としてまさに産声を上げている時期にあたるのでしょうか。生物多様性情報学の分野はここ数年間で大きく発展しており、近い将来には大量の生物多様性関連情報が自由に入手・データ処理可能になると予想され、分類学だけでなく生物学全体や社会に大きなインパクトを与えることになると思います。分類学者は特にこれからの動きに注意していく必要があると思います。

ワークショップ参加当時のニュージーランドは春の真っ盛りで、クライストチャーチは桜の花が終わったところでした。クライストチャーチは南島で最大の都市ですが、規模はそれほど大きくなく、人口は約 32 万人だそうです。ここは花の街といわれるように、市内

には木々や花が多くみられ、落ち着いた雰囲気を持っています。もっとも観光シーズンでは、日本人を代表とした東アジア系の観光客が街に溢れます。

さて、ワークショップの方ですが、今回は、Taxonomic Names の構造に関する標準化の議論が行われる大事な会となっていました。ワークショップ前の Registration の時には、いくつかの分科会に分かれて議論するという事になっていましたが、直前に変更になり、3 日間は 1 会場で全員が参加しての会となりました。たぶん、それぞれのテーマ内容が密接に絡み合っているのです、こんな形となったのでしょうか。プログラム等はウェブページ (http://www.tdwg.org/2004meet/TDWG_2004.htm) から参照できます。今年は、日本からの参加者は私の他に伊藤希氏（筑波大）と開和生氏（国立環境研）の 2 名でした。コアな分類学分野からの日本人参加者がいなかったため、特に若手研究者には積極的に参加してほしいと思いましたが、大変よい刺激になると思います。

初日は、TDWG の Mission や進め方の話について、生物多様性に関する情報の大まかな枠組みについての話が進められました。続いて、標本 / 観察 / 培養株などのデータ構造についての話に移りました。こちらの話は 2 日目の午前中まで行われました。このデータ構造に関しては、既に長い議論の歴史があり、今では DarwinCore (<http://darwincore.calacademy.org/>) と ABCD schema (<http://www.bgbm.org/TDWG/CODATA/Schema/default.htm>) という 2 つの標準的なスキーマが存在しています。今回はこの 2 つを以下に統合していくということが中心に話し合われています。歴史的には DarwinCore がアメリカ、ABCD schema がヨーロッパを中心に作られたもので、すでに両者ともに DiGIR と BioCASE というプロトコルでのデータベース間通信が実際に運用されています。GBIF では、はじめは DarwinCore - DiGIR を使ったの標本データアクセスを運用していましたが、今では ABCD schema - BioCASE もサポートしていて、その結果、現時点で約 4000 万件の情報を GBIF ポータル (<http://www.gbif.net>) から提供しています。さて、ワークショップの方ですが、両者を統合的にサポートする仕組みはもうすぐできそうです。後はユーザー（データ作成者）の方でどちらのスキーマを選ぶかですが、植物標本をきちんと扱うには ABCD schema の方がやらないといけないと感じました。

2 日目の午後は Structure of Descriptive Data (SDD)、3 日目の午前は Taxonomic Names and Concept (TNC)、午後は Unified Biodiversity Information Framework (UBIF) のセッションです。SDD は Taxa や 1 標本などの記載に関するデータの構造の標準化です。形質情報から、生態情報、分子情報など、分類形質や特性を標準化していこうという試みですが、扱う分類群により形質自体が異なるのに加え、用語の定義の問題もあり、かなり標準化はたいへんだなと思います。Taxonomic Names and Concept は分類学者にとって重要な問題である生物名とタクソン・コンセプト（日本語に訳すとややこしい問題がまた首を出しそうなのでそのまましておきます）をいかに標準化しようかという試みです。学名自体は DarwinCore や ABCD schema にあるので、それを流用すればすむ話ですが、タクソン・コンセプトの方はたいへんな問題です。そもそも分類学者の頭の中に存在する（？）タクソン・コンセプトを、どのように現実のデータとしてキャプチャーしていくかということになるので、その困難さは想像できると思います。現実的には、種などの記載文や引用標本などをま

とめていくことでタクソン・コンセプトを作り上げていくということになりそうです。

UBIF は上記の標準をまとめあげて、1 つの枠組みを作ろうというものです。GBIF がこれから向かう Species Bank の基礎になるようなものでしょうが、将来的には、生物学の知識体系を構造化するという方向になるのでしょうか？

4・5 日目は口頭発表に当てられています。ポスター発表も行われましたが、数は 7 と少なく、それもご当地のニュージーランドの人のものが目立ちました。

4 日目の夜は Banquet でクライストチャーチ植物園の片隅にある Curator House で行われました。Curator House といってもちゃんとしたレストランです。開始時間は午後 8 時と遅い時間でしたが、まだ空には明かりが残っていました。みんな開始の 30 分前以前から来て、テラスでビールなどを飲んでいました。

5 日目はおもにそれぞれが作り上げている生物多様性情報システムについての紹介と標本画像についての話題でした。みなさんまあいろいろなことをやっているものです。

6・7 日目は、サブグループに分かれてのディスカッションでした。この部分が TDWG でもっとも重要なところであり、さまざまな要素の標準化に向けて、その方向性や、具体的な案についての細かな検討を行う場になっています。

私は最終日にニュージーランドを離れないといけなないので、6 日に行われた Name & Concept に関するサブグループに参加しました。短い時間の中で、検討しなければならない事項がたくさんあるのですが、半分ぐらいの時間は、分類群の名前と概念についての抽象的議論に消費されました。このような話題の native speaker 同士の議論には言葉の壁以上に文化の違いが立ちふさがってなかなか理解が困難なものです。

来年のワークショップは 9 月 11 日から 18 日の日程で、サンクトペテルスブルクのロシア科学アカデミー動物学研究所で開催される予定です。既述のように、生物多様性情報学という新しい学問分野には分類学者の積極的な関与が期待されており、わが国の研究者が貢献出来る余地も大いにあると思います。次回ワークショップにはより多くの日本人研究者が参加されることを期待しております。

日本分類学会連合加盟学会の大会・シンポジウム

種生物学会

第 36 回種生物学シンポジウムが 2004 年 12 月 10 日～12 日に霞ヶ浦の畔、茨城県土浦市で開かれます。皆様には奮って御参加ください。

プログラム

【12 月 10 日（金）】

18:30～20:30 プレシンポジウム

「熱帯樹木は 1 年になんと伸び、なんと開花するか 温帯産樹木の故地の 1 つを推理する」

八田洋章（筑波実験植物園）

Mujahidin, Izu Andry, Anggun Ratna, Dedy Darnaedy（ボゴール植物園）

【12 月 11 日（土）】

9:00～16:00 シンポジウム 1

「共進化による植物の多様化と進化 - 最近の話題より -」

オーガナイザー：横山 潤（東北大・生命科学）

17:00～ ポスター発表

【12月12日(日)】

9:00~15:50 シンポジウム2
「枝の伸び方から木の生き方が見える」
オーガナイザー:竹中明夫(国立環境研)
八田洋章(筑波実験植物園)

会場

国民宿舎水郷
〒300-0835 茨城県土浦市大岩田 255
電話:029-823-1631, ファックス:029-823-4816
お問い合わせ
〒305-8604 茨城県つくば市観音台 3-1-3 独立行政
法人農業環境技術研究所
芝池博幸 気付 第36回種生物学シンポジウム大会
事務局
電子メール:shibaik@affrc.go.jp
電話・ファックス:029-838-8271
大会ホームページ(<http://sssb.ac.affrc.go.jp/NeFiles/36symposium.html>)も併せてご覧ください。

日本植物分類学会

日本植物分類学会第4回大会を以下のように開催いたします。

会場

高知県立牧野植物園(発表・総会)・ホテル日航高知旭ロイヤル(懇親会)
植物園の会場は椅子のみで机がありません。

日程

2005年3月11日(金)

【14:00-17:00】 公開シンポジウム
【17:30-】 評議員会

2005年3月12日(土)

【09:30-11:30】 口頭発表
【12:30-13:30】 総会
【13:30-14:20】 記念講演
【14:20-17:00】 ポスターセッション
【18:00-20:00】 懇親会

2005年3月13日(日)

【09:00-12:00】 口頭発表
【13:00-15:00頃】 口頭発表
大会参加費(講演要旨代含む)
【1月14日までに振込の場合】
一般:4,000円 学生:2,000円
【1月15日以降振込と当日申込の場合】
一般:5,000円 学生:3,000円

懇親会

2005年3月12日(土)午後6時00分より, ホテル日航高知旭ロイヤルで行います。

【1月14日までに振込の場合】
一般:7,000円 学生:6,000円
【1月15日以降振込と当日申込の場合】
一般:8,000円 学生:8,000円

申込の締切

【発表者のみ】

発表申込・大会参加費振込
1月14日必着(電子メール, 郵便またはFAX)
発表要旨原稿提出
1月28日必着(郵便または電子メール)
発表用PowerPointファイル
3月7日必着(CD-RまたはCD-RWを郵送)

【発表者以外】

大会/懇親会申込・参加費振込
2月28日必着
(1月15日以降は金額が異なります)

(3月1日以降は振り込まずに当日受付で精算して下さい)

弁当予約・振込
2月28日必着(当日受付はできません)
要旨原稿の送付先
〒781-8125 高知県高知市五台山 4200-6
高知県立牧野植物園
日本植物分類学会第4回大会準備委員会
FAX: 088-882-8635
詳細は大会ホームページ(<http://www.makino.or.jp/gakkai.htm>)をご覧ください。

日本甲虫学会

日本甲虫学会の年次大会が以下の要領で開催されます。

日時:2004年12月12日(日)
場所:大阪市立自然史博物館
詳しい内容などはホームページ(<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/shiyake/jcs-collecting.html>)でご確認ください。

第4回日本分類学会連合公開シンポジウム

日本分類学会連合では, 毎年1月上旬に公開シンポジウムを開催しております。来年1月のシンポジウムの日程と内容が決まりましたので, お知らせします。皆様のご参加をお待ちしております。どうぞよろしくお願い致します。

シンポジウム「種の違いをどのように見分けるか:生物を種の単位で見よう」

開催日:2005年1月8日(土)

場所:国立科学博物館分館
(東京都新宿区百人町 3-23-1)
13:30~13:40 松浦啓一(国立科学博物館)
連合代表あいさつ
13:40~14:15 疋田努(京都大学理学研究科)
「爬虫類の種 ヘビとトカゲの見分け方」
14:15~14:50 丸山宗利(国立科学博物館)
「昆虫の種を見分ける方法 いくつかのアリ共生型昆虫を例に」
14:50~15:25 川井浩史(神戸大学内海域環境教育研究センター)「分子系統からみた褐藻コンブ類の多様性と種」
15:25~15:50 休憩
15:50~16:25 出川洋介(神奈川県立生命の星・地球博物館)「自然界に生きるカビの種を探る」
16:25~17:00 湯浅浩史(進化生物学研究所)
「巨樹バオバブを分類する」
17:00~17:35 大路樹生(東京大学理学系研究科)
「生きている化石, ウミユリの分類 どの形質が重要か?」
17:35~18:00 全体的な質疑応答
18:30~ 懇親会

問い合わせ先:

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1
東京大学総合研究博物館 佐々木猛智
sasaki@um.u-tokyo.ac.jp
TEL: 03-5841-2820
FAX: 03-5841-8451

公募のお知らせ

北海道大学大学院農学研究科で助手の公募があります。要項は以下のとおりです。

1. 職種: 助手
 2. 所属: 環境資源学専攻 生物生態学体系学講座 (動物生態学分野)
 3. 担当科目: 大学院農学研究科環境資源学専攻および農学部生物資源科学科の実験、演習ならびに研究指導。詳細は付記参照。
 4. 応募資格等:
 - ・博士の学位を有し (外国において授与されたこれに相当する学位を含む)、研究および教育上の優れた能力を有すること。
 - ・動物生態学 (行動生態学が望ましい) および応用動物学の分野で十分な業績をあげており、また進化生態学、分子系統学の分野に広い興味と深い知識を有すること。
 5. 応募書類
 - ・履歴書 (所定の様式) 1 通
 - ・研究業績目録 (所定の様式) 1 部
 - ・主要な研究業績 (5 編以内) の別刷 (コピー可) 1 部
 - ・いままでの研究についての自己評価および着任後の研究および教育についての抱負 (1,500 字程度) 1 部
 - ・本人を良く理解する研究者 (常勤の者) 2 名の氏名と連絡先 (住所、電話、e-mail アドレス) なお、履歴書の用紙および業績目録の作成要領は、次のメールアドレス: personnel.comm@agr.hokudai.ac.jp にご請求ください。
 6. 応募期限平成 16 年 12 月 20 日 (月) (当日消印有効)
 7. 任用予定日平成 17 年 4 月 1 日
 8. 応募書類提出先

〒060-8589 札幌市北区北 9 条西 9 丁目
北海道大学大学院農学研究科
教員候補者推薦委員会委員長 中村太士
(封筒の表に「動物生態学分野応募書類」と朱書き、書留でお送り下さい)
 9. 問い合わせ先

〒060-8589 札幌市北区北 9 条西 9 丁目
北海道大学大学院農学研究科
生物生態学体系学講座主任 齋藤裕
(TEL 011-706-2477, e-mail: yutsat@res.agr.hokudai.ac.jp) なお、以下の生物生態学体系学講座の URL もご参照ください: <http://www.agr.hokudai.ac.jp/ecosys/depes.html>
 10. その他: 必要に応じて面接あるいは e-mail 等による質問への回答をお願いすることがあります。
- 【付記】
- 1) 動物生態学講座は、無脊椎動物から脊椎動物まで多様な動物群を対象とした、生態学 (行動生態学)、系統学、分類学とそれらに基づいた応用動物学的研究を展開しています。特に最近では、行動生態学を中心として、動物の相互作用系のありかたを総合的に追及することを基本とした教育・研究を行っています。
 - 2) 担当講義科目: 大学院: 動物生態学特別実験・動物生態学特別演習 (いずれも分担)。学部: 生物資源科学実験、生物学実験、化学実験、生物資源科学特別実験、生物資源科学演習、卒業論文指導 (いずれも分担)。
 - 3) 生物資源科学科は、作物学分野、作物生理学分野、植物病理学分野、植物遺伝資源学分野、園芸学分野、花卉・緑地計画学分野、植物病原学分野、細胞工学分野、動物生態学分野、昆虫体系学分野、生物科学共通分野および農場 (協力)、植物園 (協力) で構成されています。

- 4) 動物学生態学分野の現構成は、教授 (56 歳)、助教授 (42 歳)、助手 (今回の公募対象) です。
 - 5) なお、選考にあたっては、研究の方向性、原著論文・総説数および内容、公表誌のインパクトファクター等を判断の基準とさせていただきます (応募対象が助手ということもあり、個別論文のサイテ・ションインデックスは考慮外とします) が、同時に大学院生等を指導する能力を重視させていただきます。
- *****

日本分類学会連合の活動報告 VI

日本分類学会連合第 10 回・第 11 回役員会報告

分類連合の第 10 回・第 11 回の役員会が 2004 年 7 月と 9 月に開催されました。そこでの報告事項と審議・検討した事項を簡単に報告いたします。

第 10 回 (2004 年度第 2 回) 役員会
 日時: 2004 年 7 月 5 日 15:30 ~ 16:30
 場所: 国立科学博物館分館 2 階会議室
 出席者: 松浦啓一, 朝川毅守, 伊藤元己, 佐々木猛智

< 報告事項 >

- 【データベース (JTYPES)】
- ・連合に交付された科研費 (データベース) に「日本国内に保管されている鮮苔類タイプ標本のデータベース化」「地衣類基準標本の写真撮影 (地衣類研究会)」の 2 件応募があった。
- 【2005 年 1 月のシンポジウム】
- ・シンポジウムの演者は、川井浩史 (海藻)、湯浅浩史 (高等植物)、大路樹生 (化石)、出川洋介 (菌類)、疋田努 (爬虫類)、丸山宗利 (昆虫) の 6 名の先生方に決定した。
- 【出版計画】
- ・2004 年 1 月 10 日に開催されたシンポジウム「移入種と生物多様性の攪乱」は「生物科学」誌上での出版計画が進行中である。原稿の締切は 7 月末である。
 - ・文一総合出版から外来種についての書籍を出版予定である。具体的な計画は現在検討中である。
- 【ホームページ】
- ・ホームページがモニター上に表示される大きさが、使用環境により異なることが報告された。今後の検討課題である。

< 審議事項 >

- 【生物多様性国際会議】
- ・生物多様性国際会議 (International Conference on Biodiversity, Paris 2005) が 2005 年 1 月 24-27 日にパリで開催される。日本側の連絡責任者である川那部浩哉氏より会議に参加する候補者の推薦の依頼があった。検討の結果、連合代表の松浦が対応することになった。
- 【タイプ標本データベース (JTYPES)】
- ・連合に交付された科研費 (データベース) に応募のあった上記の 2 件の申請は承認された。ただし、前者のデータベースはデータの入力件数の再検討を求めることになった。
 - ・上記の 2 件に加えて、九大の昆虫標本、東大の貝化石標本、の参加を求めることになった。
 - ・今後は、学会単位ではなく、機関別に参加を依頼す

ることになった。特に、各地の大学博物館の参加が重要な課題である。また、できるだけ幅広い分類群をカバーすることも重要である。

【分類学者のデータベース】

- ・ 次回の役員会で具体的に検討されることになった。
- 【種数調査】
- ・ 今後は種数のリストから種名のリストにバージョンアップを目指す方針を確認した。
- ・ 陸上植物（維管束植物）と脊椎動物は、種名リストの作成を比較的早期に実現できる可能性が高い。将来的には全ての分類群のリストの公開を目指す。
- ・ 学名と和名の対応をはっきりさせることが課題である。

【ホームページ】

- ・ 従来と同様にホームページ上で分類学関連情報の提供を呼びかけることになった。

【メーリングリスト】

- ・ メーリングリスト TAXA でも分類学関連情報の提供を呼びかけることになった。

第11回（2004年度第3回）役員会

日時:2004年9月21日 火曜日 13:00~16:20

場所:国立科学博物館分館2階会議室

出席者:松浦啓一, 原慶明, 伊藤元己, 朝川毅守, 柁原宏, 三中信宏, 佐々木猛智

<報告事項>

【2005年1月のシンポジウム（佐々木）】

- ・ 演者とタイトルが決定した。
- ・ 「生物科学ニュース」にシンポジウムの開催案内の掲載を依頼した。
- ・ 10月末に要旨を締め切り, 11月以降に要旨集を印刷する。
- ・ 10月下旬に要旨集の広告を依頼する

【2004年1月のシンポの出版計画（松浦）】

- ・ 原稿はほぼ集まっており, 出版の準備が進行中である。

【タイプ標本データベース（JTYPES）（伊藤）】

- ・ 蘚苔類, 昆虫（九州大学）（予定）, 維管束植物（京都大学）, 維管束植物（東京大学）, 植物（牧野標本館）, 植物（北海道大学）のデータを追加する予定である。
- ・ 現在データは約8,000件。
- ・ 地衣類, 爬虫類・両生類はまだデータが入っていない。
- ・ 今後データ数は10,000件を越える予定。
- ・ 科研費は来年度も申請する予定。

【種数調査（柁原）】

- ・ 寄生虫の種数調査は, 担当者が調査に必要な研究費を申請中である。
- ・ 現在の線虫の種数データは概数である。動物寄生性の種は鳥と哺乳類に寄生するグループについて作成中, 植物寄生性のグループは植物病理学会の出版物から作成可能, 土壌中に生息するグループは文献目録を編纂中, 海産は約70種である。
- ・ 昆虫と植物は未記載種の欄が空欄である。

<審議事項>

【種数調査】

- ・ 種数が空欄になっている分類群の調査を重点的に継続することになった。
- ・ 今後, 種名リストを入れることのできる分類群は種

名を入れる方針を確認した。

【分類学者のデータベース】

- ・ Taxaへ案内を流し, webを利用して登録していただく方法で分類学者の情報を収集することになった（Taxa登録会員は現在約700名）。
- ・ 入力項目は, 氏名, 所属機関名, 住所, 専門分類群は必須, e-mailは任意とする。
- ・ データベースは業者委託ではなく, 連合が自前で作成する。

【2006年1月のシンポジウム】

- ・ 加盟学会の代表からシンポジウムの課題を募集し, 役員会で検討することになった。
- ・ 開催の費用を賄うため, 科研費（研究成果公開促進費 研究成果公开发表(B))を申請することになった。
- ・ 科研費が採択されなかった場合には, 費用は加盟学会の分担金から拠出する（分担金は1年間1学会1万円, 27学会で27万円）。

日本分類学会連合ホームページ

日本分類学会連合では, ホームページを開設しております（<http://www.bunrui.info>）。各加盟学会のホームページとのリンクや日本国内のタイプ標本データベース・日本生物種数調査の結果・掲示板など, コンテンツも次第に充実しつつあります。ニュースレターも含めて連合の活動を随時掲載してまいりますので, 連合・加盟学会の活動状況を随時ご確認ください。

TAXA 生物分類学メーリングリスト

日本分類学会連合が運営するメーリングリスト TAXA は, 生物分類学に関する情報交換や討論をするためのメーリングリストで, 生物分類学に関心をもつすべての方に開放されています。TAXA メーリングリストは下記の趣旨により開設されました:

日本分類学会連合は, 「生物の分類学全般にかかわる研究および教育を推進し, 我が国におけるこの分野の普及と発展に寄与することを目的（規約第2条）」として, 2002年1月12日に設立されました。現在, 分類学に関係の深い27の学会が加盟しています。その後, 本連合はこの目的に向かって様々な活動を展開してきましたが, このたび新たな事業として「メーリングリスト TAXA」を開設することになりました。このリストの趣旨は, 本連合からの広報のほか, 登録会員が互いに分類学に関する情報交換や討論をするための場を提供することにあります。したがって, このリストは本連合の加盟学会の会員ばかりでなく, 分類学に関心をもつすべての方に開放されます。なお, リストへの登録など管理, 運営は本連合の担当者が行いますが, 投稿は登録会員なら誰でも自由に行えます。多くの方が登録くださいますようご案内申し上げます。

2003年12月21日

日本分類学会連合

代表:加藤雅啓

TAXA は2003年12月13日に開設され, 2003年12月24日午後5時に稼働開始しました。2004年11月1日の時点で【659】名の会員が登録されています。入会を希望される方は,

1) メールアドレス

2) 氏名（日本語表記ならびにローマ字表記）

3) 所属
 を明記の上, TAXA 運営担当の三中信宏 (taxa-admin@ml.affrc.go.jp) までご連絡ください。
 * * * * *

訃報

酒井清六氏 (日本生物地理学会前会長・大東文化大学名誉教授) が 2004 年 8 月 2 日午前 7 時 18 分, 肺炎のためご逝去されました (享年 79 歳)。酒井先生は長年に渡って, ハサミムシの分類学的研究を続けられました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。
 * * * * *

[編集後記]

日本分類学会連合ニュースレターも順調に発行号数をのばし, 第 6 号が無事発行できる運びとなりました。これもひとえに加盟学会会員の皆様方の方々の温かいご協力の賜物でございます。

「前号発行以降の分類連合の活動」を毎号お知らせしておりましたが, 前号 5 号発行後から現在まで特筆すべき活動は, 役員会が 2 回開催されたことを除くと特にごさいませんでした。第 5 号発行後の連合の活動は次号第 7 号におきまして詳しくご報告しようと存じます。

分類連合ニュースレターでは偶数号で加盟学会の紹介, 奇数号ではそれに加えシンポジウムの紹介を主に行っているため, 偶数号はどうしてもボリュームが少なくなる傾向がございます。このたびは東京大学の伊藤元己先生から大変興味深いご寄稿をいただき, 内容の充実したニュースレターとなりました。今後とも加盟学会員の皆様から広くご寄稿をいただければこれに勝る喜びはございません。

原稿は柁原宛 (kazi@sci.hokudai.ac.jp) に電子メールでお送りください。電子メールが使用できない場合は FAX (011-746-0862) もしくは郵送 (〒060-0810 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻) でお送りいただいてもかまいません。皆様からの多数のご寄稿をお待ち申し上げております。

(ニュースレター編集担当: 柁原 宏)

* * * * *
 日本分類学会連合ニュースレター 第 6 号
 2004 年 12 月 6 日発行
 発行者 日本分類学会連合
 事務局 〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1
 国立科学博物館
 編集者 柁原 宏
 * * * * *